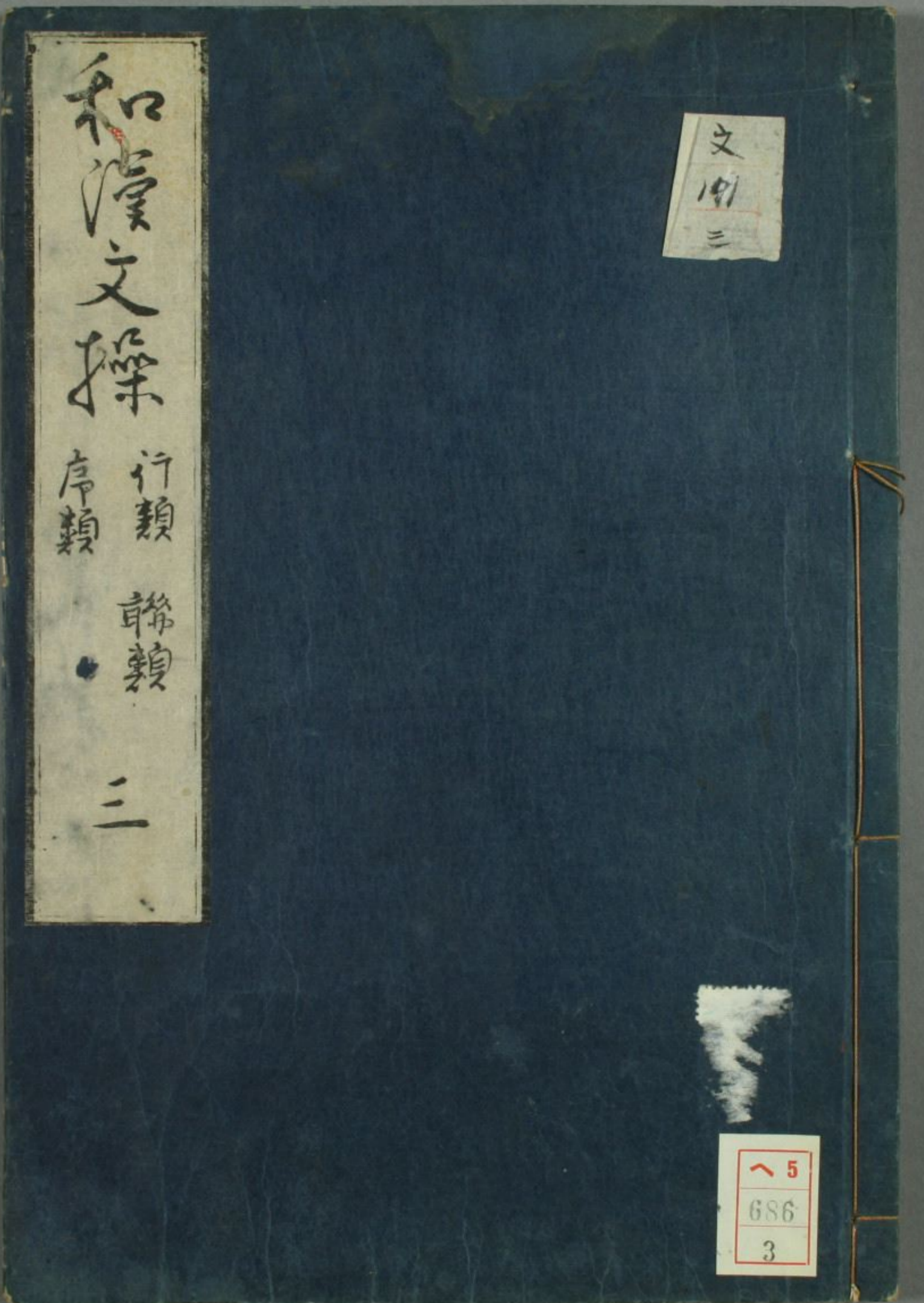


KODAK
LICENSED PRODUCT



KODAK Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



和漢文探

行類
序類

翰類

三

文
191
三

5
686
3



門 86
號 3
卷

東京大学文学部
蔵
坪内逍遙蔵

行類

和漢文採卷之三

○行類

△連他互照序

連二三四

或、おちしきとて、お尋句とあるところ、に、祖、孫、又、孝、年、
の、遺、詠、あり、け、た、は、は、る、の、時、久、く、御、お、お、の、を、
さ、ら、に、い、り、一、掃、の、香、花、し、う、あ、ん、ま、り、し、も、お、お、の、
今、様、い、く、ま、の、新、い、く、ま、あ、る、い、く、ま、も、お、お、の、
森、が、よ、ま、の、し、に、あ、る、ま、は、り、あ、く、お、お、の、

大高氏
圖書

明治二十六年十一月五日
坪内逍遙氏寄贈

686
3

を翁のたもとまゝりて色採ふは翁句とて
我れの上よりとたり

櫛のうつらんやほしむと

時をまゝも教ふやうに

かくてを翁のつらゆけことほしむ櫛と
よ本はな情とぬくまゝとと連歌之能諧と
よ相と時をた古歌とのよととと能諧之
連歌といふ二事とまゝぬくまゝとて
まと言ふの余情とよと連歌とよと一處の
之照しておとよふ人と翁の之後とまゝ

とを我くくも詞とす時をぬかふは
一と短歌のつらゆけことほしむ櫛と
言と暗記してほしむはとととと
縁起と詩とつらゆけと能諧あり
いふにのよとて連言あり能諧あり
たの意ありとととととととととと
けぬと連言とととととととととと
かくしむととととととととととと
同とおとととととととととととと
ととととととととととととととと

其名はとす用こりて所合をとおむかへし其と
 ともぬ時の日せらるる連音の家とくはらぬ
 能詩の解とまらりしとせし上其弱のまぬ幸
 とつねにたやとむ其をれ連歌と能詩と
 せらり和音の兄弟とまらしせし中きく
 へく家まらぬも所とけ所とのまらり或は
 連歌と能詩とも或は能詩と連音とも
 詩の人の和漢和と交りてくはれ
 連音の情のまらりとあひぬらり能詩の
 うつりと併りて連能一座の所合あるは連情

のまらぬをさへし其に題りて大和の能詩のま
 せむしとあはし佛堂の法とほりて世に
 人知しとまらりてくはるる能詩とまらる
 る一はとまらし一解と和音減ねの大妻
 ろくしてる上其廢のまらりてやむ可なり
 人知のまらるるにまらりてやむ可なり
 能詩の解のまらりては和音はらりて能詩
 はらりてけし比のまらりて人上連音の艶
 とりてまらりて今つて連能とあはれむとまら
 情のまらりてまらりてまらりて小町と和音と

くはむいもた美川う舟ちとらうとて軍を
連能のらちうくにきくひ耶那ふかむゆ
とまひてむしをまて連二うてこの事
てかくくを照の事とてむしきうてその人
百の功とてけちてその人とて一の事
くう流れをたるとる一人を言信の流
とらふるゆくと

惟時享保三のり十月十日和尋の将
と書とて董誦再おてその
か

連能歌仙行

校正珍

まらまげそのめねれはよとて	蓮二
ふのそのれの美命をるてま	乙純
まららぬ人も流りゆくとて	乙純
真よりりてり市北買地	乙純
甘ぬ下や月の影あまてちれな	乙純
ふ向ふよのあねるあ入	乙純
うらまにをねると信連のこ	乙純
あく香ゆうくわらし	乙純

大正十三年

五

通おろし〜むさあめ神此宮にあつゝ
 けり此^{サチ}幸といふと侍らむ
 年とてにえ院の美も知れ〜
 子あひの宮此^{サチ}幸といふ〜
 お膳と辨り六とあをれ入
 五つりあ〜丸旅のや〜
 便船とこら〜へ〜り ぬ〜吹
 小貝ひみよや汐のりあ
 ね〜と〜ね〜り 又月お
 く〜枯〜を〜れ〜此 高〜宮

二 珠 由 純 二 珠 由 純 二 珠

時あつとも吾にゆうの 秋のおね
 ぬ森とらをぬ親音の下
 写かりしつち〜ん村か〜
 お^カ厨〜せ〜く〜國^カ替のあね
 〜〜〜ん〜と〜ま〜と〜哀〜
 響んかのゆ候き〜し〜
 的^カ音に語〜あ〜く〜む〜
 酢の加減の 一子お侍
 笑ひ〜若や〜たのを〜に〜
 障の葉〜ま〜と〜あ〜と〜物〜

二 純 由 純 二 珠 由 純 二 珠

三十一

三十一

月に入朝の月夜のあつた
 う
 随分のまん中へきて 栞くつり
 塵の山第もたそに 栞あふい
 めやしちくぬ 栞の 栞あふれ
 めやちり 栞第とふれ 栞す
 じくおく 栞馬代せくも

純 由 珠 二 純 由 二 珠

○作者列傳
 正致ハ板木氏ニシテ伊勢ノ山田ニ師範トス連歌
 ハ里村家ニ通称セリトツ庄年ヨリ家産ニ

撫ラス家法ハ建治ノ式目ニ據テカラ風美ハ宗祥ノ方角
 ニ遊ル一生不羈ノ隱逸人ナリ「光純ハ其内ノ高才ナ
 博ク其内ノ詩書ニ通ス姓ハ木林氏ニシテ師徹ヲ家ト
 セリ東業ハ今ノ俳名ナリトツ乙由ハ同ク山田ノ産ナ
 當時ニ俳諧ノ名匠ナリ昔ハ東若坊ニ六段席シテ
 新百韻ノ若ニ遊ニ中比ハ涼亮存ニ鼓舞舞シテ之足後ノ
 曲ヲ尽スニ集ハ俳諧ノ変ニシテ祖公羽儀後ノ時世赫ト
 云ハ其後中川ノ家ヲ道テ今ハ木林ニ遊リトツ

△俳諧求韻序説 弁短歌行 土方四立

奥儀抄云歌と韻字と用(まゝあり)二十一字

の歌を才と句の終字と初約と一才又句の終字と
 終約と一約とつらつらもさへ取らんとせしむる
 又七歌の才二句の終字と初約と一才又句の終字
 と二約と一かくのえく替りて約とつらつら短歌
 ありとと短歌といふ喜撰式ありし新撰髓
 古今集より抄本なり或云訪よりらうのたゞ
 歌を我國の詞あり句とありありわらわらひ
 いふちり一短歌ハ賦あり長歌ハ五言の詩
 旋頭二言ハ江南の曲混本言ハ越調の詩連言
 ハ聯句あり廻文ましくかひひあつたふらむ

事なり不しとあるよりありとせしむる短歌地ふは
 ありて奥儀抄よりわけ存たりまはれ他諸の求
 韻の何れありし遠くを奥儀抄より後とらひ
 近くを抄の文溢し假名の得たりとありつら
 又や連歌の聯句ありし他諸しその約字と
 して休諸の連歌とらふへしあつたふらに
 栢梁臺の聯句あれはこゝろくに酒折宮の連歌
 ありて漢武帝も日本武もけるの祖とあるに
 せしむる末諸の式目と奥儀抄も二種の約例
 ありて又句と原約とあり言熟と細約とあり

麻韻とやまたまの音韻といひ細韻とよひの
言に業とつよけり歌の束韻とよひ二行に辨の尾不
ありて短歌といひ長歌といひ雙反本といふ時ハ
短歌一準とす。絶句也

雙反本

以六句ヲ為一絶才七句終字ヲ為初韻
才六句終字ヲ為終韻

あはれおのれおのれおのれおのれおのれ
おのれおのれおのれおのれおのれおのれ

短歌

以五句ヲ為一絶才六句終字ヲ為初韻
才五句終字ヲ為終韻

あはれおのれおのれおのれおのれ
おのれおのれおのれおのれおのれ

長歌

以八句ヲ為一絶才九句終字ヲ為初韻
以七句終字ヲ為終韻

あはれおのれおのれおのれおのれ
おのれおのれおのれおのれおのれ
あはれおのれおのれおのれおのれ
おのれおのれおのれおのれおのれ

はれい和候の韻例とありて和歌とよひ句ありて
二韻ありて和候の韻例とありて和歌とよひ句ありて
君不聞のいふきい和歌此のいふきいあつたの
のいふきい起詠うていふたふたふたふた
四句二韻といふきい和歌此のいふきいあつたの

のりも換韻の言句と同韻とかくわらふも今
の論に用ひかゝるふありとらふと漢家の韻
例も長篇の文と句論として歌行のれ換韻
を用ひるに或は四句一換へ六句一換へ八句十句
ちりも粗ある一奥儀の法より後勁あり一はや
今や和漢の例とす一て和漢の言句此求韻とす
ちの言句の尾字と初韻とす一才二才の句
ぬむ一とまれの句と韻とす六句の韻とす韻と
換むとらる時次の言句は他韻とぬとすの尾字
と初韻とす一言句の尾字と用ひるは

は漢家の律法も我々の後和の語
とすありて才二才の尾字と初韻とす一
二篇とすは四句一韻と用ひるはや二巻の
換韻は短歌行とす一韻とす一和行と六句の
韻とす一長歌行と八句五韻とす一はの法
六六も六八も六の付一六篇六章の詩ありて
韻とつゆり換やとらんまらるる韻の持へ中間
の丁句と八韻とあるは假名の二韻十字
より一句とすは不自在あるは好す
の法はとす句一但し假名より真名の韻例

あれは例として万葉の韻とありて先仙陽居の二韻
とも用ゆるはむとかくは求韻の訖るる不の中たの
漢和の不自在なる句に韻字ありや
あらんるを史記より他語の手話と夫ら言
做中の用とよし色尚もく韻の無細と倫
まゝ細弱と月七花とのなきは無韻いかに
玉鑰。たり。或はるるはるらたれも
他語とけし音諸からふれい多し同字の論と
ささじりし和漢の韻例も同韻同字
と用ふれい今や他語の韻式もかれとむれよ

無細く同字別吟の例とみしそ余しと不
平ぬをさき右例の用持と定候もへ或は二
同韻と用ふるもさく二韻と論するは
右と和漢の恒例あり和歌の古法に論する
るは我家の式とらむと字保を弁あさ
蓋山老人の書とて莫く春と暮秋これ
二とより短歌行とて歌仙行と伝は後の人
はく酒色を
散世 壺峯 白梅 後乙文 榎葉 主人 方立 等 操
毫 於 觀 世 音 寺 之 獅 子 窟 昇 天

求韻短歌行

良産安年

香久山のこらにわすや若花を

言もろふ馬折ウキヨリ　そかく

扇とて霞くむておろしそく

湯あゝゆゑた心康とまげ

裂朱を何そく余ふと守あり

草川の畦に橋のあらし

山の端北月まらしくとまらまら

席も秋ふく扇のうら凡

蓮二

方登

乙久

二

峯

文

登

二

猶又故入秋とまききくね巻堂

た官もみ石つきくゆてあく

言をやうんわこらわかたりむ

はふるな船と泳む命ちら

大坂や中坂と波のまらうれ

ひりどからふと君とあひね

以のおれ猫めかろひの産と細

ちり花世つよ國伽の一桶

まら花とやと詞やお脚ても

染指める花かうといらく

二峰

登

文

二

峰

文

登

二

峰

二

されたる此位様も水月此就
 穠あはれまを殿もあまふ
 しかつらも家くしるの音とあまて
 前と祈りもあふ此位も
 幕ひとむにうの眞もあま
 連歌と奪ふ 子あのみとく
 二 文 峰 二 文 登

○何云は行へ連き之能清とやむむ持句と地統の
 佛割衣と搦めよふり一篇を合て婉舞の句は七
 三ると座の二句にたりて座のら風と手懐たれ
 此位より入舞のあし吹かふる萩のうららと座の

一子とよもあふしと音と錯綜して連歌の裁入
 と御とよもあふしと音の言扱とあまてとれとと
 持倒の絶妙と称しとくし今やとて天のまふ行
 とふれん奉句のまの裁断あり方望のゆるはれ能清
 の束勅とて此書をと百世の鑑勅とんふ奉句を
 此式の物語りして我あまの支配とまふあふも幸
 二句まの頂とあふりて黄老人の御所とまふと地と
 是かくおれあやまらと道むとせと連二のまふ
 あらむしとあふの御とまふと司あふしと家に
 寄衣とて連能の古懐帯とあふしとまふと
 中しふ衣を人のまふの巻とあふしとまふと
 ちりしとあふの巻とに宗祇の服ありはて而勅の

名残のつらき七句目も素春とちて老人の奉向と
 らしきものや春はよむとて。は向のむけりて
 忌をいふ所もさうして春向の若と再進まき
 敏捷の妻と我家の替ふく連歌とちて連言
 と奪ふよふ心なれくうかく求韻の自在とゆめい
 て千歳の孔子もわくされあむ頓挫と能談の
 こと地なれ例の虚実とあふまうて飛滅く北行此
 大膽ちり評者も一擧とてく。おあしるくは例のあ
 てもや作者と越の石動^{イヌキ}は位もつれし和漢の
 得まうして和春の例より喚て松子岩の之仙
 とよも地と文操の選場うく慧く庵記よ
 といれありとめくとも記よ互見を一

求韻歌仙行

川乙由

け秋のるくくこもとおもふうか
 赤瓦山より昔の妻のまむれ
 特長いそ昔の園とちらちげく
 猫殿あつるさや喉の中
 一巾のふゆと草司にねく命
 ちてるるるのまふか
 ねの本此世のさうと括くうり
 打ちのうささよおりの中子

兔土
 蓮二
 表如
 土
 由
 如
 二

蓬うわけて噴あけいけを甚弱い
 染く布中とある。南の
 嵐ふらでちほくちらひる
 馬子ふはげめありあま
 ぬくさた七比丘危ともう浦下
 肉は月い月とあもせれ
 有印もも人のみふ一雨に
 むさう坊ふ粘活の指あへ
 強うこれまふは柳う一歌き
 二のちちこれお川

由二如由士如二士由

薑形くつふとけを噴あけ
 〇此をよあまうとあを危傍
 起る。おまうは子のあれうつり
 ちのわろれ南天うら
 耳よとちさおの豆磨らうと
 便るくは比敷のせんきく
 らせあせし筆のうさうい
 牡丹とあれははうし業をさけ
 入れのま本とほりうらあを
 冠かむのうらうらうら

如二由二如由士如二

双六行

華夷人

けせとつちのぬ伏見 しろり平野 の奥へはせし人あり
 折げ垣のわの巻もつらとちら部大和のまわりの
 人のほんとへんさきかきく双六 舞まわればはるはる
 とあやうりまうり人小町のちちり大和 ちりさき双六 の
 きのゆねのま空鐸とくま利花のちりさき双六 の
 のゆそゆく二十一年 暮とくま利花のちりさき双六 の
 うりし二十一年 のちりさき利花のちりさき双六 の
 てきし二十一年 やみ伴頼のちりさき利花のちりさき双六 の

四十 うそあう河竹とむ依見とま難波のちりさき双六 の
 ちりさき七のちりさき利花のちりさき双六 の
 帳七月のちりさき利花のちりさき双六 の
 の色に入のちりさき利花のちりさき双六 の
 こら四二とくま利花のちりさき双六 の
 かねつ馬鹿のちりさき利花のちりさき双六 の
 ちりさき四のちりさき利花のちりさき双六 の
 ちりさき三のちりさき利花のちりさき双六 の
 ちりさき二のちりさき利花のちりさき双六 の
 ちりさき一のちりさき利花のちりさき双六 の

きくちやうしひある。おのはやうたきくくきりふきの
むしふくさちちちりきり

○註。大和トハ双六ノ石立ナリ本双六ハ二町ノ角ニ石ヲ五ツ立
置テ十五ノ石ノ早ク入ル方ヲ勝トス大和ハ敵陣ノ地ニ石ヲ
二ツ残シ其ニテ我陣ノ外五地ニ立テ敵ノ六先ヲ留シトシ
我陣ノ五地ヲ作シトス勝負ニ速速ノ遠アリトフ。鷲詰十町
モのふくもあましむしにうたれんむむふれぬゆそ
ゆしき。▲源氏空蟬ニ軒端。萩ト其答ヲ打テ同筆ノ時
ノ詞。とふいとあきしとととくしそよおあしあきあ
さぬいよのゆけくもさくくしあやうさふとあり

●長恨歌。梨花一枝春帶雨。トハ美人ノ愁ハ泣キテ云ナリ

和事ト無トノ假訓ヲ称スシ。○空蟬。卷ノ引号。いよのゆれ
ゆけくのおとをハハなと九ツ中と十六とゆり梅は三三
句ハ前ニ二十年ノ郷言ヨリ四十ト余所トノ訓ヲ假シ三三
ヲ鎖詞ノ絶妙ト称スシ。○魏女。女のセトのまのんね
まのすき。一おのゆいしすれももる梅は三三詞。難波
ノ遊女ヲ請出シテ今ノ依見ニ住セケン河竹ハ例ニ節ノ鎖
ナリ。▲明皇雜録。皇與貴妃。録。將北。惟重。四。可轉。
上連。呼。呼。散子轉成。四。上。悦。賜。四。録。云。重。之。重。四。二。朱。
字ヲ用ルハ此時ノ賜色トフ。梅スルニ芙蓉以下ニ四所。重。園
ハ總テ長恨歌ノ歌入ナリ其下ニ見合スレ但シ草露ニ下結
ヒテ魂魄不返。草。ト云ル。裁。断。自由ヲ称スシ。△まのふトハ
和事ノ詞ナリまきり氏まけき氏两用ナリ。▲馬。鹿。原。ハ

大和

世

我名と削の華表人ふゆつらむとけり文鑑
石歳行のこもく遺稿のたねの又幸しくおぼくお各
と題きりけり先解の十名のも一ある一

△大和聯句序 並歌仙行

渡白狂

詩歌者夫風雅之花而所謂詩變而為
騷騷變而為詞皆可歌鼻則詩與歌者
從音訓之違永詩了則曰作若永歌了
則曰訓歷總者道之優游而遊俗談笑
語共不忘意之風雅之謂也乎左在則

其詩有聯句而其歌有連系事者從詩
歌之獨有面白麼我云人云聯其時之
意也則可弗諸越之人與大和之人為
揚詔詩歌矣耶初社月夜兮花且兮見
給侍人之心心而知召賢敷愚也鼻矣
貫之之詞麼為此意矣手抑鼻聯句之
始則或曰上則唐虞之廣歌下則漢武
之栢梁共或曰聯句古無此法自韓愈
孟郊始共或曰諸公已有聯句之詩謂
自韓愈始者非也共於茲思聯句之濫

大和聯句序

渡白狂

觴則如蘓瞻與蘓由之應對或者四言
或者六言五言七言者勿論而為言合
上與下則漢曰聯句居和曰連歌歷古
集之證文麼數多也左有厚纂為成一
卷物者但可謂自韓孟始尔哉左有
如園鷄納涼者連續一題之意而或者
成百韵成五十韵言則謂兩吟之詩矣
其後我朝如江心策度者觀前起後而
為似今之連俳其譬則如以秋月對山
堂以梅花對荊棘唯合十二門之各同

而物無體用之差別者字行義暗許之
黑豆而謂詩歌無姿情之論矣夫先師
大昔所遊洛之相國寺日有一聯之名
對鳳兮桐倒掛章知客鏢也妻在周白龍子
此一對者膾炙其世而稱下倒掛與在周
之意對止乎遺稿魚書二倒掛下東坡詩三出テ厚二以
掛ルル故ニ名トセリトク在周ハ齊物論ニ鏢ハ鏢也覺ハ在周
也ト云ル然ハ在周ハ即鏢ナルナリ妻トハ妻化ニ成テ胡蝶ト云ル
例ニ右語ノ裁入ナリト對ハ五山ノ會合聯句ニ座ノ字近ニ
附アクニシラハ對ヨリ各ラ移テ以テ妻鏢子ト云リトク
從是江西湖南之間念遺聯句之名其
與所白龍子與者先師之聯句名也其

大塚卷之三

三



後之祿之始也。其在武以之區蕉庵而
 素堂與故翁夜話之次撰之。日月日記
 述往古評漢和之為不自在當時論聯
 句之為不吟味而其夜試有一聯之隔
 對。唐土有芳野櫻。特妬海棠。揚州
 無伏見桃。被惡山薑。白龍子。
○遺稿。魚書。此一
 聯。文和聯句。濫
 觴。予以此。故古今集。他諸歌。摘。唐土。芳野。ト云。ハリ。大
 ヲリ。聯句ノ結構。ハ和漢ノ兩用ヲ通ス。キ。厚。ニソ。山薑。ハ本州
 ニ出。テ。白木。ノ。名。ナリ。揚州。ノ。産物。ニ。テ。柳。葉。ヲ。忌ム。物。ナリ。ト
 然。ハ。此。對。ノ。初。ハ。唐。揚。州。國。各。ヨリ。土。州。ノ。地。形。ヲ。對。シ。増。シ。テ
 山。海。薑。堂。ノ。一。名。ニ。用。フ。附。シ。テ。ハ。此。等。ヲ。意。對。ト。モ。字。對。ト。モ。是。テ
 定。規。ト。大。和。ノ。聯。句。ノ。鑑。ナリ。ト。ハ。彼。記。ハ。漢。和。ヲ。モ。論。談。セリ。

如斯者我亦建詩聯句之一格而和漢

可通假名真名之用為也。率或謂大和
 聯句者其樣似鳳城之五言聯而全用
 我朝之俗語。居其言字。羅山之七字城
 而爾亦不為者也。其意如何也。則聯句
 者本出詩之變律。而對其字其字之姿
 了共不運其題其題之情。譬則如以牛
 對僧。以松對鶴。句對字對者不及言意
 對知聯句之作不作。了哉。然則月尔者
 有日星之體而花尔者有枝葉之用。則
 俵如玉椿與糸柳。漢如山色與水光。在

可以鳥之聲對梅之香了則介部隨類
 而為附方重毛其某町可謂聯句之註
 用犀哉于然對十二行之字耳則從乾
 坤時候之二行不及器賦食服之差別
 態藝虛複者似有各而無形而矣今也
 我家之所建者每句每字分姿情之品
 而逐一定附方之法譬則以古風對新
 月此類曰文字之姿矣字面者對日月
 了其古風者風俗而弗天象故也譬則
 以對鵬對圍子此類曰文句之情矣字

五字聯

いふにや持

孫老く暇し心

掃のりくんれ

おと坊

○評云け聯を係中の念をいふるは素秋年の意解し掛
 きりしらすと先師の孫子と傳ふるは父の老をい
 祥はの高きありけい句は誤解され今や五字
 といふ一牧の聯とさきりたれや祥室の座を
 みて遠道の子僧と打殺してや命い聯の
 十郎の句は一字を云々の長

○序類

奉珂憶上人歌序

阿佛尼

北の郊々や西の行世二子中下備う見ス阿憶上人
 行の字は行の字は見ユ
 ともかくあつてもとつていふまゝとてのたの西とあり
 ともかくおと空也上人のちとていふまゝとて本上山の人
 寺寺名ニヤ備う見ユともかくとてありまゝとていふまゝとて
 ともかくあつてもとつていふまゝとてのたの西とあり
 とやとていふまゝとていふまゝとてのたの西とあり

敢て去擔行回華對類初子士麼偏冬
 僧麼及著述而知平仄事者殆無所越
 聯句物唯從東冬至咸嚴迄知今平色
 之韻字則上去入之之韻者有我不知
 而知之理栗尤有人者不及姿情之塩
 梅溪尋城南兮倭櫻城西兮效韓孟江
 策之達者而眼儒書兮助佛經兮混尚
 覺切々之故事古語些知和訓漢音之
 可假用真於與松待之訣栗則縱夫謂
 學向之果敢遺矣斯而知其學之用與

大深集

廿

無用了則知詩歌有今日之優游知聯
句有姿情之品而誠被謂和後之文人
矣然則聯句之厚用也識論語之所謂
蒼身之名而謂厚學文之始終矣夫

聯句歌仙行

郭公松獨立芋頭雙
橋落羅離卦
王炊新月芋
始噫一驚山雀
橋尼子

杜若鶴雙橋尼子
家榮調肺藏
筆堀古風芋頭雙
思之隱波鱗芋頭雙

沽諸茶守袴
園寺鷄無伍
顧身浮竹他
衛士待油賣
平家花將敵
中
彼岸糸團子芋頭雙
身貪常嚼老
題騁源之位
捧文梅早咲
娘鑑照親園

痛也木綿裏
桂川猿有整
濺渡淺茅荒
代官停米商
秋中蝶先茸橋尼子
節供化蚌腸
口滑頓為倡
式師又五郎
先業竹初橋尼子
世衣韜武光

終
鳥藏三日月

鵲渡二星霜

鐘而白蘆穗橘尾子

盃十益菊香芋頭雙

白宮語第様

仇厥惜鉅坊

日本治花幕

春初調柳相

註曰▲發端ノ二聯ハ全ク大和ノ新格ニシテ郭ニハ和歌情ヲ結
杜若ニ俳諧ノ次ヲ余スニ様ハ凡雅ノ本懐ト云ハ本ヲ漢家ノ
例ヲ見ルニ生類ト植物ノ二對ハ文法詩格ノ常ナルヲ何トテ中古ノ
聯句ヨリ古人ノ法格ヲ失ケ然レハ今ノ稱スル所ハ郭ニハ松ニ
杜若ノ鶴ト當季ノ花鳥ヲ錯綜シテ郭杜公若ノ字意
ヲ配リ獨ニ雙ノ數量ヲ合セタルニ是レハ多クニ效トナリ

▲此聯ハ謎文ナリ離ハ板橋ノ中断ニ喩ハ肺ハ五臟ノ金ヲ財
離火肺金ハ五行ノ意對ニシテ臟ト財トハ通用ナカラ
卦字ニ高絶ノ對ト云ハ例ノ觀ハ杜若ニ橋ノ一字ヲ
高セテ卦各ニ假橋ノ次ヲ見キナリ

▲此聯ハ假對ナカラ凡月ニ大和働ヲ稱スレ然レニ古風ハレカ
トハ論語ノ詞ニ安ヲ認タル儒者ノ養生ヲ笑ルナリ堀ノ
一字ハ筆耕ノ語勢ヨリ當季ニ句作ノ働ト云ク炊堀ノ
意對ニ聯句ヲ尽セリト云ハ觀ハ分限者ノ月見ナリ

▲此聯ハ俳諧ニシテ稱スル所ハ一ト山ハトノ字對ノ配ヲ見ル
キナリ論語ニ季子文子之思ト云ルヨリ句情ハ無道
ノ世ヲ隱レテ鱗ノ如ク穴居ストソ邦無道則隱氏云ル
字毎ノ裁入ヲ稱スレ觀ハ机右ノ山雀ハレカニナリ

▲此聯ハ古語ノ裁入ナリ論語ニ求^テ善^キ賈^ヲ而^テ沽^ル諸トアリ
 對ハ小町カ休ナリ幸都學少町ニ痛^クリヤ小町と此レ
 一^レハ優女^トトアリテ首ニ裏ヲ掛スルと食ノ様ヲ云^フ
 然レハ對ノ稱スル前ハ茶^ノ今ト木綿トノ俗談ヲ用得テ觀ハ
 但シ牽人^ト躰ト見ルヘシ

▲此聯ハ一巻ノ奇絶ト云シ鶴^ト傳^リニ古歌ヲ摘ミ猿^ノ王^ニニ古
 詩ヲ採ル増テ桂川ノ用ヲ評セハ歌仙ハ例ノニ花ニ月ナカラ
 或ハ見渡ニ月ヲ含^メタ^リ桂ノ僻情ヲ稱スレ去^レハ各町ト云^フ
 人名ト云^フト偏^ラカ^ニモ對ノ心得アリテ蘭ト桂トハ糸^トニ圭^トラ
 對シ寺ト川トハ其名ノ奇ナリ譬言ハ蘭寺ニ暖^ク越^テト對セシ
 ハ中古ノ麻字ト云^フキヤ顧ハ小町ニ逢坂ノ園ナリ

▲此聯ハ連歌ノ漢和トモ云ハンニ句共ニ詩歌ノ詞ヲ摘テ

顧ハ人望ノ限ナキ觀相ナリ此等ヲ聯句ノ地ト知ヘシ

▲此聯ハ俳諧ニテ衛士ノ由賣ヲ待^テ夏ハ四式モ裏テ白^ク居
 ノ^カ流^行様ヲ云^フル例ニ前句ノ觀ナカラ待^テノ子ニ作者
 稱スレ本ヨリ衛士ト代官トハ官職ノ品ナカラ字意ノ配ラ
 稱スレク由^ト米^トノ附合ニ俳諧ノ笑言ヲ稱スヘケン但シ
 御^ノ平^ノ貢^ノ之^レ米^ノ賣^買停止ノ制礼ハ代官前ノ定法
 ▲此聯ハ一轉ニテ是ヨリ二折ノ曲節ヲ尽シ存ナリ平家ニ釈
 申ハ申^ノ族^ノ意^對ニテ花蝶ハ例ノ大和風ナリ去^レハ佛^ノ功^ノ徒
 ラ讚^シテ譬言ハ蝶ノ花香ヲ嘗^ルルカ如ク衆生ハ其徳ニ由^レトモ
 曾^テ其跡ヲ見^スト云^フル遺教ノ意ヲ攝スルナリ但シ代官ノ觀
 ニ平家ノ裏ヘテ附スルハ家語ニ苛政ノ諷詞ト知ヘシ

▲此聯ハ十成ノ俳諧ニテ仏前ノ供物ニ泊^ラ置^スル彼^ノ岸^ノ

殊勝ヲ山明セルナリ拜ノ子三作者ヲ看破スレ彼岸ト即供
ト八時候ノ對ナカラウ多ニ八團子ヲ彼岸ト云ク第卷ノ即供
ト云ハシカ知レ然ルニ團子ト鮮腸トハ似類ヲ指テ各字對
ト云フ去ク温飢粉ヲ撮入テ鮮ノ拔身ニ似タルヨリ其各
ヲ鮮腸汁ト云ヘル上ニ脂ノ詞トフ化ストハ雀化蛤ト云ル
月令ノ詞ヲ假リテ糝ノ括回スルヲ雜煮ニスル莫モ独法師ノ
少錦立テラシ観ハ例ノ釈教ナカラ蝶ニ仏前ノ飾ヲ見ル
▲此聯ハ前ノ負ホラ観テ此躰ヲ削ノ地ト知レ嚙老ト和歌
ノ詞ヲ摘シ及信ハ滑稽ノ辨利ナリ然レハ此地ハ曲部ノ
會釈ミレテ一折ノ向ニ兩所モ有レシ
▲此聯ハ滑稽ノ觀ナカラ一巻ノ曲部トヤ云ハシ或曰啟上ノ
戲ニ係レ位ヲ觀ントテハ治川ヲ鞭ハ火桶頼政ト云ル

四品ノ題ヲ入テ一首ニ讀キヤノ仰ヲ承リテハ治川ノ
佛ノぬちくおほはれん氷魚けさうふくくやまら
らむト取アス讀メリトフはれく竹ちち屋敷へ進衛の
優式とらるれん衛士の又み節と仰とまらるるまらるる
此等ヲシテ字對ノ奇絶ト稱スレシ
▲此聯ハ竹竿ノ詞ヨリ花枝ニ文ヲ附ル全ク竹竿庭ノ觀
ナリ然レニ文素ノ一格ハ文彩ニ色字ノ假對ナカラ柘地
ノ素練ヲ例ニレテ意對ノ儻ヲ稱スキヤ先素糸ノ二字ハ
周礼ノ詞ヲ轉ス論語ノ朱註ニ見合スレシ
▲此聯ハ全ク俳諧ニレテ極鑑ニ世衣ノ附合ハ字對ノ中ノ
意對トヤ云ハシカレハ觀ニ鑑ノ二字ヲ寄テ親屬ハ古歌
ノ裁入ナリ親武冠光ノ輕重ヨリ照臨ノ字對ヲ稱スレシ

▲此聯ハ和漢ヲ錯綜シテ別三格ノ備アリト云ハシ史記列傳
 五車身キテ尽キテ良弓蔵トハ韓信カ武功ヲ評シタレハ月ニハ
 前ノ老字ヲ顧テ聯句ニ附心ノ奇絶ト云シ増テヤ古語
 ラ翻轉シテ鳥ノ蔵ルトハ夕會ノ會釈ナリ物ニテ故衣
 ラ採リ古語ヲ摘ム又ハ此聯ニ效キナリ鶺鴒ノ霜相ハ古歌ノ
 裁入ナリ但シ之曰ニ二星ノ如キ音訓ノ附合モ亦有レシ
 強テ二星ト和訓スヤラス日。星ハ例ノ假對ナレバナリ
 ▲此聯ハ句作ノ奇絶ト云シ晨鐘ニ百ハノハヲ残シテ東白ノ
 様ヲ云ルヤノ穂ハ橋ノ顧ナリ増テ其對千字ハ時深
 切ヲ以テ平音ト成セル此等ヲ聯句ノ文覺ト答言レシ但シ
 益花不足益香ト云ル古詩ノ詞ヲ轉シテカラ白。尺四ノ二子
 ニ光彩ノ備ヲ林スレシ

▲此聯ハ名残曲節ニテ顧ハ所ノ遊宴ナリ四ニ好色徒
 人ヲ第ト云テ某蹟ト云ルハ歌舞ノ地ノ風言ナリ源中ニ
 白宮ナラハ様字ニ俳倡ヲ尽ナリト云ハシ仇殿ハ顧朝ナリ宮
 殿トノ字對ヲ稱スレシ運生坊ヤ馳ノ夏ハ少景向答要美ニ夏
 此聯ハ録倉ヲ顧テ當時ニ冬平ノ結文ナリ柳箱ハ礼哭ニテ
 重ト羊トニ吉凶ノ沙汰アリ然ルニ此對ヲ穿鑿セバ柳箱ハ
 柳即箱ニシテ依主ト自業トノ釈文ニ據ラハ花葉ニ對ス
 へク花幕ニ對セト我乃ノ俳式ニ月花ノ句ハ指テ沉吟
 セス一座ノ首尾ヲ先トスレシ然レハ拳句ハ勿論ニシテ其日
 其時ノ用ヲ知テ法ニ泥ヌラ時宜ト云ハラ夏ニ俳諧ノ法ナレ
 ラ知ラハ風雅ハ今日ノ優游ナルヲ知レトワ
 浮云い一美子と云所の感なり遊てくねのあはれを

くちりて予がて凡雅の地おきととく、業裏の
題の二子ありとあやしく大小の類此二子あるん
たり、摩訶と阿佉との梵語とが、も下二胡粉
とりて、その年の大う小と和も、も漢も、も一方法
にらりて、仲子聯ととあきらまり、しとと又、操の
選揚、はけ、るに又選の連珠も又格、よめ、れ、と、れ、と
操題、よ、あ、げ、え、な、と、な、る、大、少、吟、と、の、り、け、り、
聯類、と、い、き、り、と、と、し、業、の、操、あ、れ、し、和、漢、
新格、の、書、用、と、稱、し、て、又、番、舎、の、あ、り、
序、と、い、ふ、り、と、い、ふ、り、や

摩訶

一こつんまろく咲きり

業此書

阿佉

若菜摘宛菴于葛
八十年元亦待春

○浮世の辭の序、い、簡、古、な、り、例、と、能、語、の、を、也、あり、と
移、と、一、減、し、業、裏、の、二、子、題、を、杜律見題文、と、い、ふ、
と、所、買、も、い、は、し、人、の、能、り、の、大、う、の、小、の、を、け、て、減、業、裏周、
麻、と、い、ふ、も、本、と、モウウ瓜、と、い、ふ、も、あ、ん、の、中、
の、中、の、利、あり、て、商、家、の、存、性、と、い、ふ、ん、も、あ、り、ま、る、に
大、や、の、二、子、と、の、句、を、楚、語、の、中、の、利、あり、と、い、ふ、例、と
凡、雅、の、又、ち、り、と、い、ふ、世、に、て、有、用、の、節、を、い、ふ、也、

上文章の優海とある一横連珠とを好歌の二
名也格と文選の陸士衡の文に云る一今の格者
武藤氏より一尾の坪下と云る一春田舎を此
の格ありと云る

関口聯

おとと唇 とつ あおむら 芭蕉老人

○評云は春ののそ おと 唐詩のこまぢりおとと
芭蕉庵のたつ とつ と洛の吉兼子とあむら
春柿舎の聯とあり とつ 和詩の一行おとと
おととと とつ ちりちり

堪忍聯

字訓詩

張昇角

おととと馬とやれ 了場の標れりとせよ
んとんととととと 此の柿の氷とけけく

○評云此詩は字訓の格とあり一ことと起語と列二は
と起語とあり起るの語か とつ いけととととと
大和の新格とあり一作者は文皇序と各録あり

鑑亭聯

東花坊

山とをくねむとととととと

水之近者乃月と云く風と云く

郭公のお

今と澄を此あらしむ也

時雨の月

いしと水と空にあり

今と澄を平の

系しと心と空にあり

かしらる也

○澄と澄を平と却の新深しありて北七里ふふ是
ありきるに今時の言は行とありて板とありて聯と
ありてりとは濃の野航とありて柳雪とありて
あらしむは聯の世と二牧ありて百世の論とあり
かしらるに今と澄と記さるるの也

面者全不對了共鮮腸者言麦粉之摘
入則也此外隨字行之輕重而不離姿
情之二事者爰以郭公之一卷可知大
和之凡例也初謂古聯句之法者不知
為孰代誰人之提凡從五十韻至而韻
然其今之聯句者長了則之數韻礎自
有自己之愛栗先者從二十四之短歌
行用之十六之歌仙行而長其唯可限
長歌行矣手前則五山之標式亦麼有
歌仙聯之沙汰與所次謂去嫌之古式

とらせ洋上戒の唐帰らりまを。まうけぬとい大伴
のるとしてら。らの空固ちる色と。あひまのやま
六のあくと。藍よりも澤よりてん。とてかきるはたらく
せしゆのたれ。や。保くも。世のちりの底よ。のれ
ら。心あうも。孫うり。ま。う。と。あ。ま。し。き。う。ま。よ。り。て。還
く。の。あ。ま。ら。り。も。海。あ。む。た。い。ま。た。た。と。ゆ。り。た。く
と。る。ら。ら。る。る。

○註曰○又選_三越身業_三南枝_三胡馬嘶_三北風_三云_三世意故郷
ヲ思フ直ナリトソ△厚カ鳴七玉鐘_三東ト都トノ枕詞ナリ
枕詞ノ更ハ道理有無ヲ論ス_三カラス故々トハ世類ナリトソ

○潘何_三流_三予_三。マの巾とけり。きとく人あをけり。り
あれああ。のま。ゆ。▲水相觀_三八觀_三經_三ニ_三之_三觀_三ノ_三ナリ_三月_三光
童子ノ故_三交_三アリ_三細_三拳_三ニ_三及_三ス_三▲高僧傳_三惠_三遠_三法_三所_三勉_三
六時_三孔_三讚_三云_三其_三後_三ニ_三善_三道_三大_三師_三孔_三讚_三ノ_三偈_三ヲ_三佳_三ホ_三ノ_三給_三介_三
トフ△阿_三陀_三經_三七_三堂_三行_三樹_三皆_三是_三四_三堂_三云_三同_三經_三有_三七_三堂_三池
八_三印_三使_三水_三云_三△無_三量_三壽_三經_三隨_三應_三而_三現_三云_三同_三經_三而_三味_三飲_三食_三
自然_三不_三盈_三滿_三云_三○玉_三樹_三司_三葉_三平_三云_三ノ_三足_三實_三八_三山_三ト_三云_三ニ
削_三ニ_三和_三歌_三ノ_三枕_三詞_三ナリ_三△荀_三子_三學_三不_三可_三已_三青_三出_三於_三藍_三而_三
青_三於_三藍_三水_三出_三於_三水_三而_三寒_三於_三水_三
○浮_三云_三は_三よ_三ま_三か_三の_三底_三の_三白_三す_三云_三湖_三南_三の_三百_三を_三歌_三ノ_三秘
系_三を_三な_三れ_三う_三お_三く_三わ_三ら_三し_三と_三ら_三か_三き_三ま_三よ_三の_三あ_三れ_三と
け_三席_三の_三文_三路_三と_三便_三と_三あ_三ら_三ら_三に_三和_三奇_三の_三ぬ_三き_三と_三求

支那書三

まを想ふらねるはしくちねむ向對ははりのて
 ゑまの以糸と淵一そ人の風信と移らして玉
 くげぬらぬらあまのあまのあまのあまのあ
 他渡のさす採うして秋家のあまのあまのあま
 家一ちとせ帯と臍脂の好らるるあまのあまの
 藤為相にの母うう安嘉の後のの條あまのあ
 二条のあまのあまのあまのあまのあまのあ

道遙遊序

東巻序

る道遙のさすあまのあまのあまのあまのあ
 せとあまのあまのあまのあまのあまのあ

地をさすのさすあまのあまのあまのあまのあ
 まるの馬の向うはくさすあまのあまのあまのあ
 既らとの尾あまのあまのあまのあまのあまのあ
 打たるとはあまのあまのあまのあまのあまのあ
 かくとあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ
 くらきあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ
 おもるもあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ
 せうとあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ
 笑とあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ
 んとあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ

ては櫻井のまゝいふにありて、川村のまゝ小菅の
以て、菅人にあらず、かゝる時、大谷とあるは、
皆その天のあそび、て貴族、貧窮と人のあつて
あつたりきり

○註曰、逍遥遊ノ二字ハ莊子ノ篇名ナリ、逸註、遊者心有天
遊也、と梅スルニ此序ハ車濃ノ事、文ノ羽異集ニ在リ、各
ヲ假テ四年ノ狩ヲ方ニ其一篇ノ序詞ナリ、羽異ト、羽異註
ノ意ヲ運ヘリト、詩經ニ、鳥飛、天、魚躍、例、列仙傳
丁固字、仙術、化、鶴也、弘祖統紀ニ、觀音ノ妻、女ト化
シテ、馬郎婦ト成玉ヲ食アリ、例、十九應身ナリ

○序ニ、此序ハ、今ノ子ノ文、作、て、子本、も、歎、の、名

一、寫、と、遊、の、一、字、と、形容、と、一、と、固、と、解、者、の、例、
心、の、の、と、子、の、の、と、地、の、の、と、子、の、端、の、鼓、舞、の、例、也
況、や、心、事、の、道、道、一、貴、族、貧、窮、の、親、お、と、ま、れ、遊、人
の、昔、の、お、と、は、の、と、ま、れ、例、の、孤、諫、と、ま、れ、て、例、ノ、中
の、刀、と、お、ま、れ、一、撰、者、と、文、鑑、ノ、姓、名、あり、て、か、り、て
祖、又、お、ま、れ、と、か、り、柳、子、の、親、お、ま、れ、と、ま、れ、の、事、係、の、事、
あ、つ、り、例、り、て、道、ノ、断、續、の、歎、と、お、ま、れ、と、ま、れ、

二、見、文、基、繪、序

張、昇、南

お、ま、れ、け、二、の、浦、とい、せ、の、圖、此、の、お、ま、れ、と、ま、れ、の
而、一、字、一、と、お、ま、れ、と、ま、れ、の、道、と、ま、れ、た、ま、れ、の、例、

とかきもと西行上人の以我と云ふて我々のなるの我
 おきりありてはむじうりうり玉の女付孫より柳様を令る
 の處とよとゆひ弟妹はしるものおとまう一う處に
 盗人の目とよゆもを念し曾思をめんとをせやせん
 細波のありのまにに魚舟めりき柳とまをうとて形を
 如根とむらうてはくくくくくくくくくくくくくくく
 てなんかかかかかかかかかかかかかかかかかかか
 く倒のちかかかかかかかかかかかかかかかかかかか
 祖の舟のせおよとてかかかかかかかかかかかかかか
 ぞうと拍とあれいそれと湖東のぬを井り家かてまぬ

梅とあつりし梅はまは結とあつりもさ梅のまは十
 も何んをれよ茶を解めうらあつりつ蓮二房のうらあ
 ありつれも。お梅の池又あり幸保のまは一月月此
 はあは仙觀の蓮二の筆とてさう後けはまを作
 らもさ梅の観とてさあさあさあさあさあさあさあさあ
 もあつりし梅とあつりし梅の二下歳しりさあさあさあ
 氣弱し郵のぼもさく石を而個の格もあつりし梅
 びす月の中ありてはあつりし梅の月とてさあつりし
 天下の梅のふさあさあさあさあさあさあさあさあ

○註句○梅のふさあさあさあさあさあさあさあさあさあ

○又ゆりねのあつま 西行上人の住マテ所ハ二見ノ西吹ト云フ里ニ
 岩三扇ヲ敷テ文臺トセシ其跡ハ今ニ在リトフ△十論ニ能借
 一ニ傳のほあり 世情の人私と云論の常はうー一あり
 まゝ能借のふくまうて 世情一と云風情の辨とまゝ一
 とれ△論語ニ繪事ニ後素ヲ云ニ按スルニ世ニ子ハ結前生後
 ノ常ナカラ世等ニ文章ノ新編ヲ知レシ△海松ニ蛇ハ硯箱
 ノ繪ナリ然レテ兩用ニ書スルハ五老井ノ作ナリトフ硯箱ノ書ハ五老
 折ニ在リ文臺圖ノ下ニ見レシ○松梅ノ證文トハ裏書ノ後句ニ
 二三と云々松のありと梅の月とありニ按スルニ世裏書ノ落
 ノ折後園ヲ始ナリト書テ五老井ノ云レテ圖ハ松朝日ヲ昏ク
 へトト録色ナラ子ハ筋ハ二見ニ松ハ論カクメ梅ニ臆月ノ圖モ
 アリテ故世羽ノ筆跡ナラトテ其後ハ梅ナリモ昏レトフ

○唐詩ノ言觸奇ニゆりくともよもやせきーのかあゆり
 かゆりの非めあんかきりーと 智多ハ尾張ノ一郡ニ万歳
 ノ出所ナリニ按スルニ世對ハ一巻布ノ要文ニシテ岩ト扇トノ不形
 ラ云ナカラ多ニ世序ノ辞宜ヲ調へ多ニ世文ノ談諧ツルニセシ
 字對句對ハ例ノ言ハス文ニ意對ノ絶妙ト稱スル△百林廣記
 繪ノ法格アリ氣韻生動ハ六法ノ才ニノる老而簡ハ八格
 ノ才ナリ細筆スルニ暇アラヌ△白馬ノ文章訓ニ俳諧ノ文章ナハ
 興用ノ用アリテ合書訴快ハ有用ノ用アリト云ニ按スル世詞
 ハ文字ノ人ノ要言ヲ文章ノ意地ハ世簡ニ知キナリ
 ○浮ぶはるりて 世内の書りーと云ニ云々の由本
 とまろー百世ノ能借の詞をきくも文とせの始
 中務の次才と云るー作者と尾符の各讀屋入

く一後といふらうもなほい△奉長茶と石下八祖の歌言
 たり十論法式下に出たり△殿村田畠史ニ金毛九尾野狐
 アリテ姐已ト化して國家ヲ乱セリト細奉ニ及ハス△古今集
 序ニ秋の中少(孫)田川ニありぬみまをい 帝の御前ニ臨
 んたひ△其のあしよりゆくのゆくそ人たらんをい
 とのいあむいゆいさる△厚玉ハ夜ト云く團ト云元控詞り
 去ルシ肩墨ノ詞ニ寄セえ俳諧ノ微中ヲ称ス(七世等ハ句對ニ
 似テ凡是ヲ文對ト知キナリ)△芋頭ヲ轉ト成ト芋露ヲ
 掌ト成セル中古ノ檀林漸ニ在リ物語ノ二子ノ起結ナリ
 △噺州ト百題ノ用ナラフ噺ノ一字ヲ夜寒ノ物結ト成セル
 文ノ新續ヲ見ヘキナリ

○薄云はたつらと虹号のそくをに二冊の授おのり物

ろりこくと草らと主あもてい能治るこまきと
 つまらしてい備の終より不ハ九尾よ七尾の詞の富
 たりアキ子の化地のちうくはひまはまに能治
 のる物語としてい一作者と岩城のうして能治の
 七尾よ七尾と者来よい仲の抄をうく或も一鬼橋
 としヤカゆまうと一葉の能治としてい

愛百合序 並詩

東乙文

我南水陸竹木之花者徒梅也櫻之咲月
 惜藤山吹之春而愛牡丹則思芳茶居愛

三事則思水仙歷在有名如董大將之所慕
 手習之君愛情者不忌其面影則也于然
 牡丹者被生達魏姚之眾而盛李唐之間
 也則戾子之障子厥日居薛繪之筆司儼
 露而玉妃麼霞湯上之面詳殆不耻千金
 之價乎徒是風通我朝止乎元祿之後者
 被麗而菊之名而牡丹者知有而無也至
 增而不條此世之得蓮花之有仰嗅乎者
 愛情者例之可誠厚哉友在則所我鄉之
 榛菓子者離蓮幽之氣之古風而園植色々

之百合而且培之夕淮分不作十二一室
 之厚矣共紅白自有品而如頭插兮如居
 賦兮隨風而有為彼地等向了者徒本謂
 此花之愛相矣爾有則榛公之所好者和
 漢尋仙數奇之色而彼方慕卓文君之前
 空居此方壽末摘花之假看季友有者所
 謂年月厚經了共露不忌給弗其人之本
 情正耶但者效或法師之物數奇而可謂
 玉色之有色隱者矣乎
 百合不誇蘭菊名自斬芎茶似傾城

文操

四十三

たりと捧ふのむねうくして原身とほらまゝに
 ころとと虚宮の隈うしてはれくめこころ地うしてたき
 へるも七作を越の名動うはる東と姓うして千尋年
 ありこつう白梅溪と標号うして畷記不忘の博士あり
 こころと取歌亭下うするんをうして

文操卷之終

十三年の冬、文操は、
 白梅溪に別荘を築き、
 畷記を著し、
 博士の位に就いた。

